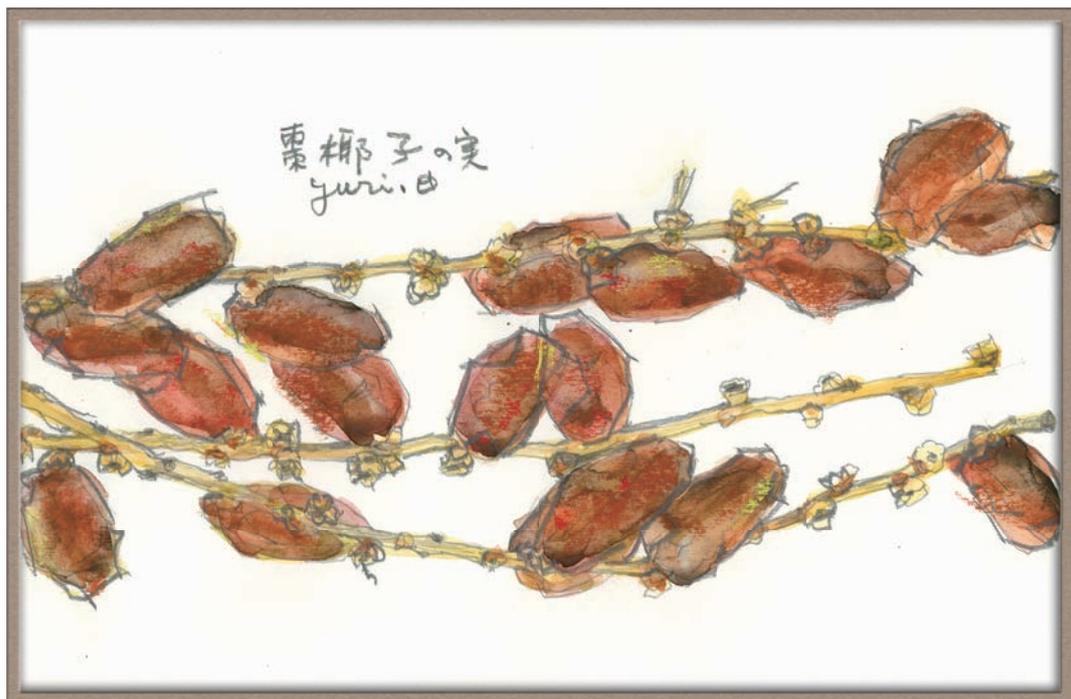


三河 アララギ

2020年11月 霜月 しもつき

十一月号

第六十七巻 第十一号



ニューヨーク日記(169) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NOVEMBER 25: TUOME

Blue Shoe Diaries



今年のレストランの流行りはモダン化されたチャイニーズ。その中で注目されてるTuomeへ行ってきました～騒がれているのがこの豚、皮が超パリパリ！お肉トロトロ。なんとなく北京ダックを思わせる感覚。付いて来るジンジャーソースが良く合う。ピーナッツソースのヌードルと一緒に来るんだけどサイドでオーダーしたおこわみたいなご飯がぴったり！もしかしたら今晚一番美味しかった物かも！止まらない～

This is Tuome's "The pig out"! It's ok to believe the hype! Super crunchy skin, almost like toffee (it gets sticky in your mouth) and melt-in-your-mouth meat. The ginger sauce and sambal a must but also good just as is since its sitting on hoisin sauce (a la peking duck). Loved that the salad had persimmons and was a great palate cleanser. The pig out comes with some peanut noodles but I really liked the sticky rice steamed in a lotus leaf that I ordered on the side. It's addictive and quite possibly the best thing I ate tonight. Just imagine this: kale, chinese sausage, and duck fat, in a lotus leaf perfumed soft sticky rice.

アカンサスの徑

御津磯夫

東北より次男来りてわが臀の疼きにとどめの針を刺したり

たはやすき文字さへ忘れ月日をも錯覚しをりしばしばにして

冬の日の光の中に臥しをりてつかれつつ良き豫後をわがもつ

柸もくろがねもちも黒松も枝々たしかにわが庭に立つ

ペンだこに注射器だこのかさなりぬしわが中指のいまは美し

生きをりてはやき蓄の紅さしぬあしたは咲かむ鉢の實ざくら

蒲団より折々いだす足裏にわが家の畳つめたきがよし

描きたる人は亡くして紅梅の今年の花にわれは存ながらふ

腰抜けしまま帰りしが子の針に妻の哺育に立ちなほりゆく

囲はざりし木下のダチュライちはやく黄の芽萌えいでて輝くばかり

ははぎくわ

大須賀寿恵

ゼラニウムの赤とピンクはま盛りにて蝶舞ふ庭に洗濯物ほす
雨やみて光さし来ぬつみあげし堆肥の上に湯気立ちのぼる
転任のきみに賜ひしアメヂストの指輪を送別会にわがはめてゆく
君等二人といで湯の街に旅せしは去年の冬ぞと写真に記す
どの副長も個性ありて面白し良き人がらの人ばかりなり
汝なくば吾の事務所はたちゆかずとおだてられつつ二十年すぐ
持ちゆきし浜木綿今年は咲き初めしと便りは東京より
県の係長待遇だよと所長より指導主事の辞令われはもらひぬ
初めての女の係長待遇とひとびとは祝ひいふとも妬み心か
特殊児のまことのこころほほえまし菊の名記す一つ文字にも

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

御堂山山嵐をさまり時雨止みぬ姫塚除幕に招き下さる

芳信公討ち死の跡に面向かひ息女の姫の碑の建つ

姫塚はわが家の遠祖の姫といひて一生守り来し九十の翁

姫塚とともに生き来し翁より祝ひうま酒をいただきにけり

姫塚の碑の除幕式より帰りたり黄葉あかるきわが庭へ

父の木の柁古りてこの幾日花にほふなり秋ましろにて

さわさわに花は匂へり忘れつつ過ぎてをりたり柁のとき

東京より来たりて黒きボカドという果物らしきをわれに食はしむ

診療をはじめむとする朝の窓あけほの杉のもみじ濃くなる

入覚寺の手入れとどける松高し朝空に浮雲一つなくして

ははぎくち

河原静誠

車前草と枸杞と十葉摘み集め土用丑の朝陰干しに

わが居間に日毎用ふるお師僧の遺品の花莫蔭色あせて来ぬ

窓を打つ風の音すでに秋深し衿を正して宗義をひもとく

玉萩ともそうじつとも呼ぶ高野箒うさぎかくしとも玉箒とも

野ぶどうの小さきつぶら実掌の中に秋の日受けて青

桐壺も紫式部も生うる山この石巻に秋の日暮れぬ

一と月を日毎待ちをり野ポタンの赤き蕾のふくらみてより

はく息の白く見えつつ今日一日寒行の経を誦す街角に

日だまりに毛糸編む手にたわむる吾が三毛猫は鼠をとらず

健やかなりて今年は涅槃会を吾が本堂に暁に修す

海原

蒲郡 岡本八千代

用ありて娘の車に乗りて帰る遠回りして海原を見つつ

今日の海稻生の海の海原の遠々としてしらじらとして

海原を静かにみてゐる二人にてそれぞれの思ひ何も語らずに

土屋文明に八千代といふ名の妹あり嬉しくなりつつ夕餉の支度す

今日もまた薬玉の房ゆれてゐるそのこと誰にも話す人無く

コロナをも殺すかも知れぬと朝より渦巻蚊取線香燻らせてをり

久しぶりに空の晴れたり南側の縁側に来ても書かむとす

常々にあなたが絵をば描きてゐしこの縁側の机に向かふよ

縁側の窓いっぱいにせまるごと蓄よ蓄の秋のダチュラよ

夕暮れの風の吹きくる庭に佇つ独り住まひの独り心よ

間仕切りのうすき長き夏のれん今年もやうやうわれがかけたり

秋のれん今年もしづかにゆれてをりその向かうにはああだーれもゐない

本当に天つの人となり在す時々「お父さん」とまだ呼びしてみる

今宵出でし月は旧暦十三夜しばし眺むるひとときの心

いつまでか外出禁止の古い人われマスク姿のあはれ影法師

花当番

豊川 弓谷 久子

暑きまま今日より九月大型の台風南の海上にあり

九州はまたも大雨台風は朝鮮半島に上陸したり

供華もちて子は出掛けゆく無住寺となりたる寺の花当番

訪ね来て話しこみゆく人のあり来し方行く末子の話等

近況も少し語りて洋服の直し三枚頼みゆきたり

ワンピースの丈を短かく縫い直す直し仕事は我が得意業

グッドタイミングと子と笑い合ふ洗濯物入れ直後のこの俄雨

さまざまの世を生き伸びて来たるかな九十三歳我が生れし朝

誕生日のケーキを前に子と孫とテーブルかこむ今日秋日和

我が好み覚えいてくれしかモンブランゆつくり味はひ満ち足りてをり

気が付けばはや秋彼岸仏壇に彼岸団子を子は供えをり

墓参りも墓の掃除もすべて子に任せて久し彼岸入りの日

手造りの栗むし羊羹貰いたり今日の抹茶の楽しみなこと

彼岸花は咲き出しいたり藪陰の人も通らぬこの草の道

草原にえのころ草の穂がゆれる秋となりたり長月もゆく

棗椰子の実

東京 今泉 由利

現実が静かに静かに過ぎてゐる地球にたった独り居ること

チェロ・ソナタ第3楽章ラフマニノフ目覚めゆきゆく思考のなかに

やまもとブーゲンビリアとコーヒーの木と生きづく緑私の緑

自らの生きる命を浄化して聖観音像彫る一刀一刀

緩坂^{ゆる}か急勾配か選択す権現山の駅までの道

各々の野菜の呼吸に合はすると化学パッケージのアスパラガスを

酸化防止特殊フィルムの中に取りトルコより来し棗椰子の実

窓開く私の音にも驚かぬ群雀のいとほしくあり

電線に止まる雀のふつくらと押し計りをり今朝の気温を

開きたる本よりこぼるる押花よアルゼンチンの国の花セイボ

深々き赤でありたりセイボの花に長き年月過ぎたる焦げ茶

何処にある何語の国かアルゼンチン辿り着きたるままに住み初む

行き行きて出合えし人と人毎に助けられこしいままでの日々

スペイン語をダッテイルと教はりぬ棗椰子の実毎日食す

くつきりと一本の線は境界を空の白雲海の白波

蠮螋

豊川 安藤和代

猛暑中陽に向きて咲く向日葵のやさしき黄をまぶしく見つむ

鴉すら鳴かぬ残暑の昼さがり松葉ぼたんのたくましき紅

孫のいる土日の昼餉楽しくて美味しくていつもおかわりをする

在りし日の夫の面影鴨居には褪せし帽子の片付け出来ず

裾上げも針と糸の時は過ぎ孫はアイロンでスーツと終えたり

調理中下の匂うかべば包丁をペンに持ちかえ食卓に座す

風はやや秋色となり佳き歌が生れそうです夕空を見る

二日前求めしバナナソバカズをいっぱいつけて吾れを待ちおり

スーパーに巨峰一房九百円横目で見つつ足速に過ぐ

長月に生れたる友は「長代」と言う逝きて十年今宵月澄む

秋色になりて蠮螋八センチかまを持上げてアミ戸に動ぜず

紅白饅頭

春日井 清澤 範子

令和二年町内役員の年となる家族三人にて役を果せり

敬老の係となりぬお祝はJCBカードと紅白饅頭の用意

町内の役とはなりぬ敬老の手配終りぬ滞りなく

敬老のお祝の会は三密にきをつけて紅白饅頭配り終えたり

敬老会は町内行事の一つなりお祝饅頭は一世帯一個

三月に一度の病院へ来ぬ八月二日蝉しぐれの中

行きつけのスーパーへ来ぬ食料品は買わねばならぬ

朝の運動としてシルバーカーを押す七原医院まで往復にて

武者隠し付くる室には西陽差し簾つりてもなを暑きかな

よろける吾の手を引く娘と買ひてこし大根こと煮るよ今夜は

夢見の秋

大阪 伊藤 忠 男

スズキの穂闇夜に揺れる里の道犬の遠吠えどこからかなり

里芋の葉にのせ祝う御神酒夜空照らすは十五夜の月

ススキの穂庭の濡れ縁飾る宵見上げる空にまん丸な月

メルヘンと縁なきこの世今日もまた書類手にしてズームに電話

携帯にメガネドアキーあちこちを毎度探すやお出掛けの前

この秋も心と体もて余す未だ解けぬか巣籠もりの日々

秋雨もしとしと降るか春雨のお株を奪う長月の雨

内視鏡検査待つ身のあやふやな気持ちどこでか何で支えし

穏やかな日々の続くもこれはこれいつかいつかと心配の種

垂れ下がり実る稲穂に赤トンボ止まり損ねて頭を垂れる

青き蜜柑

東京 矢崎直人

日射し夏吹く風は秋散歩道日陰を探し日陰を探す

鰓呼吸しているだけで充分な口をパクパクさせてる金魚

秋曇り歩けば暑き湿度かな青き蜜柑と赤唐辛子

隠れ鬼していたように赤い月呼ばれる声の聞こえきそうな

薄雲の上に上れる月見つけいつもと違う風景見つけ

妙な雲浮かんでみると観ていたら「かなとこ雲」と名のある雲で

礼祭の中止に赤の丸印秋の雨降り破れ始めん

お浚いや一人落ち着きやってみるもいちど最初から繰^{ハナ}り返してみる

蒸しても涼を感じずる月曜日そろそろ秋のらしくなるかな

追いかけて掴んでみては影法師塩辛トンボ藍の目玉の

金木犀

東京 森岡陽子

倒木も朽ちゆきし木も秋迎へ茸並ぶもまだまだ小さき

花の名の書かれし札は朽ちかけし半分解らぬ黄色の花の名

羽広げ気持ち良いのか鳶飛ぶ電線見えぬ秋空を一羽

せせらぎの流るる音や木棧道秋の風吹くシラカシの森

空屋敷静かな庭に実むらさきはびこる草の間姿美し

木道の先に一本枝広く淡く染まりぬもみぢの葉先

おはようの挨拶交すお宅から金木犀の香りこぼれ来る

久々につるべ落しの時忘れいつもの人達吉の川追加

しみじみと清らかな月に祈り込むコロナ禍治まり友との時を

身にしむや深夜に流るるラジオよりトランペットの星に祈りを

桜淵公園

豊川 白井信昭

清しく朝の門口にあまた咲くジャスマンの花今を盛りと

朝夕に新聞とりだす受箱に仄か匂えるジャスマンの香り

佐脇浜臨海緑地久しぶり雨露しとど草に覆わる

潮入の浜の樹木はしとど濡れ叢にすたく虫の声

持統帝幸ししここ上陸地か阿礼乃埼跡黒人の鞆旅歌

亡き師の揮毫になるルビ入りの語句わが確かめる碑の表裏

岸伝うひと巡りする中に干上がり砂洲群がる海鶴

下潮のふたつ橋下石垣の今が底の歩き渡れり

豊川の赤き吊り橋風情あり景色見えつつ行きに帰りに

切り立てる断崖絶壁奇岩なし川下に見ゆる中央構造線

古書肆

蒲郡 杉浦恵美子

こんなにも何処へも行かぬ夏が去く予定表など真っ新なまま

ごみ出しの百歩余りに秋を知る蜻蛉群れ飛ぶ裏藪の道

十代の我が感傷を捉え得て未だ放さぬ清光館哀史

五十年も前に読みたる文章に未だ酔ふなり香気果てなし

デュランタが初めて咲きぬ我が庭の猛暑の後の片隅葉陰

この全集求めしときはやがて何時か緋く日々をたしか夢見き

時を経て売って仕舞ひし全集本何時か誰かが手にするやもと

蒲郡なんとわざわざ遠くから店主驚く西尾の古書肆

一軒は高齢なれば無理もない繰り言尽きぬ地蔵の寄合

我が此処に暮しし十年知らぬ間に地蔵のお守りも様変わりゆく

貫 禄

横 浜 阿 部 淑 子

ベートーベン生誕二百五十年特別演奏不滅の楽聖

辻井氏がベートーベンの「月光」を「かなしみ」と名づけ心の色弾く

田中さん百十七歳世界一「死ぬ気がしない」と笑顔の貫禄

入浴時湯船に肩までどっぷりと首胸手足と感謝の手入れ

歯の治療で往復バスと電車内マスク着用揃って見事

九月より新装成りて再開所スープレランチに舌鼓打つ

九月場所熊本の期待担いっつ正代優勝大関昇進

壁の落書

豊川 山口千恵子

網戸ごし吹き入る風の涼しくて窓明けて寝むよクーラー止めて
乾きたる洗濯物をたたみをり日のぬくみ未だ残りある

列なせる休耕田の大豆の畝暑き真夏の風に吹かるる

おづおづとためらふごとき蝉の声やがて大きく鳴きはじめたり

かしましく鳴きぬし蝉の声もたえ夜には秋の虫の音きこゆ

はえ揃ふ休耕田の大豆の畝風わたりゆく葉うらみせつつ

連日を暑き日々の続きつついつも来たれる猫も来たらず

柵をして山羊四匹を飼ひてゐる若き夫婦はつらつとして

くよくよと物事考へるわが性格思ひても何もかはらぬ

孫の書きし壁の落書そのままに消さずに残す二十幾年

白鷺は青田の上をとびゆきて向かうの畦にすつとおりたり

猛暑が居据る

豊川 夏目勝弘

長梅雨につづき猛暑がまだ去らぬ庭の仕事が手につかずなり
猛暑に馴れむと一時間の仕事木影に逃げ込むが多くして
体重を一キロ使ひ逃げ帰る冷水シャワーの恩恵のなか
稲の穂の出づる前に刈らねばならぬそして河原に干さねばならぬ
午前午後と下着を二度着替へしてメ縄の材を調へにけり
秋立ついへども家に籠るのみはて知らずの記を地図にて旅す
田の道を歩む前を三密にアキアキネの忙しげに飛ぶ
アキアカネ群れより放れ顔の辺に近づきすぐると声に言ふ
法師蟬の声を聞きしは一度のみ短かく拙き声ぞ淋しき
朝あしたにも夕べも蝸の声を聞かず早や立秋となりてしまひぬ
夜半に覚め汗を拭かぬ日のつづくなにとはなしに嬉しくなりぬ
光陰は矢より速やかと称へしありき祭りのメ縄を作る時期なり

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

いつもとは違ふこの夏も酔芙蓉花しろじろと我が庭の中
濠川ほりの流れ轟轟とたえまなしけふも聞きに來いさぎよき音よ

山崎 俊子

白萩の画かれしローソク供へたりコロナを知らず逝きしあなたに
己が手に己が髪切る鏡の中右と左のまたもちくはぐ

三田美奈子

今頃は昼寝か風呂かはじめてのデイサービス之母待つは長し
裏庭に日毎現はる三毛猫の我が足に戯じゃれ気を惹くがごと

水野 絹子

さまざまな雲広ごれる一点に真白に輝く入道雲のあり
どしゃぶりを待ち焦がれたる夕立もわが畑には一滴も降らず

牧原 規惠

「ままごと」も「人生ゲーム」も出番なし老三人の盆の暮れたり
子守宮が今年もガラス戸に來てをりぬ電気消すのを待ちてやらねば

稲吉 友江

気の緩み少しづつかと思ひつつマスクの予備をバッグに捜す
バルコニーに両の手延べて独り占め今宵の満月チヨウザメの月

鈴木美耶子

背戸の角野ボタン咲きし今朝の朝石畳に落つひとひらふたひら
梅雨明けて常のごとくに虫干しす桐箆笥の中のわが詠へ物

吉見幸子

今朝の空たちまちにして炎天か梅も蠟梅も葉のしをれて来
編集に再放送に見なほしとその場しのぎの放映つづく

牧原正枝

燕^{つばくろ}三羽電線に並びゐてチチチと啼きて吾を呼ぶごと
いいこともあるよと慰められし朝鎮まる心気づけばたのし

森厚子

現代学生百人一首

東洋大学

一音に想いをのせて音楽会広いホールに声ひびかせる

堺市立新浅香山小学校五年（大阪府）

飯沼優月

すみっこで忘れられてた雪だるま白い息はき君と見ていた

堺市立新浅香山小学校五年（大阪府）

土志田みくり

だんじりはひきがうまいなあせだくで見れば見るほどはくりよくがある

堺市立新浅香山小学校五年（大阪府）

日浦里南

兄ちゃんといっつもけんかすぎすぎて毎日毎日ねこもびっくり

堺市立深井西小学校二年（大阪府）

佐藤戴斗

おじいちゃんいつもやさしくしてくれたもつとみんですごしたかった

大村市立三城小学校六年（長崎県）

吉岡美南

私達今年最後の運動会大きくおどるぞ川棚エイサー

東彼杵郡川棚町立川棚小学校六年（長崎県）

長谷真心

大地揺れ山から岩が滑り落ち一瞬にして消えゆく暮らし

コロンビアインターナショナルスクール二年（埼玉県）

神田蓉

中東で今日も銃声鳴り響く銃を持つ子の幼い瞳

芝浦工業大学柏中学校一年（千葉県） 菅谷学毅

贈呈誌

森岡陽子

青森アララギ 第四百十二号

○息深く吸ひて動悸を鎮めぬる窓にあふるる庭木の芽吹き

鈴木隆之

○つづらごの痛さを庇ひ横になる吾にすりより眠る犬の「そら」

三上信子

○常夜灯の天田内川あまだないがわに寄する波橙色して静かに揺るる

相馬富美子

○早々に猿に南瓜をやられしと苦笑ひする隣のご主人

木浪みつゑ

○夜越山桜並木の花の宴蟹の甲羅の酌む酒うまし

浜田清勝

冬雷 10月号

○暑き夜の明ける気配の午前四時静もる街の風景尊し

櫻井一江

○ 閑居して不善を為せるわれなれや手なづけせん
と雀に餌を撒く
天野 克彦

○ 青蛙もソーシャルディスタンス守るのか
三匹ほどよく距離もち休む
兼目 久

○ 葉の陰に皆にはぐれて返り咲くすみれ
一輪寒くはないか
内垣 米子

○ 田のめぐりにせまき水路の整いて水絶える
なくさざればたつ
高松 美智子

○ 柿の葉をみごとに食べる虫のあり
その虫どこにゐるのか見え
ず
齋鹿 ミヤコ

○ 大津波より泥にまみれて戻りたる孫らの
写真を返すもつとめ
岩 淵 綾子

○ 生垣の隙間にみゆる空室の庭の芝生を
荒草覆ふ
桜井 美保子

○ 暑さゆえ眠られぬ夜を庭に立ち東の空に
惑星見たり
山本 三男

○ 鮪獲れて沖より戻る威勢良き船乗りの
顔夏真盛り
松崎 みき子

人生お祭り太鼓

高橋育郎 作詞

人生いつでも お祭りだ

何だかんだと 祭りじゃないか

一寸先は 暗闇だけど

夢の灯りを かざしてはやせ

ドーンと人生 ドド ドド

ドド ドン お祭り太鼓

人生苦もありや 楽もある

神も仏も ある世の中で

何もくよくよ することないさ

腹の底から 吐き出せ息を

ドーンと人生 ドド ドド

ドド ドン お祭り太鼓

順風満帆と いかなけりや

帆綱ゆるめて 雲でも見てろ

浮世の風は まわっているよ

いい風吹いたら 出直しゃいいさ

ドーンと人生 ドド ドド

ドド ドン お祭り太鼓

『俳句』

無住寺の荒れし参道彼岸花

松本周二

岩陰を潮のたばしる秋の海

露の葉を白露のつとと迂りをり

ひと突きで岸を離るる水の秋

山元正規

キューポラの街の夕空鳥渡る

岩ひとつ沈めて清し望の潮

秋果盛わづかに残る山の色

田中清秀

目覚むれば闇夜の窓の稲光

苔の寺細き日差しや初紅葉

寄せて引く小石転がす秋の波
夕紅葉黒漆喰の蔵続く

浜田紀政

曼殊沙華群生を染む黄泉の如

振り向けり遠くの空に秋の雲

森岡陽子

秋高し浅き深きの川の色

一筋の流るる音のさはやかさ

嬉し淋し電話頻りに敬老日

重野善恵

花あふれ既に幾たり墓参

姉を訪ふ途中黄金の稲穂波

眉引いてひとつうなずく今朝の秋

植村公女

検眼の小さき嘘や水澄めり

動かざる回転木馬八月尽

新そばや岩木川源流の村

今泉如雲

城跡は十五万坪蟬時雨

蝸や津軽に京の古語のこる

分け入れば太古の泉秋涼し

木村歩歩

秋彼岸大蛇が下りる金字塔

月光に生贄の台影暗し

爽やかにカリブの海や馬駆ける

沙羅の花惑星地球に白く咲き

今泉由利

続きこし千年万年龍の玉

木漏れ日を集めて白し沙羅の花

赤赤く天辺に咲く曼殊沙華

子規句集

木下闇ところどころの地藏かな

紫陽花やきのふの誠けふの嘘

命には何事もなし秋のくれ

木の末に遠くの花火開きけり

かさね吟行会

「東高根森林公園」 9月

田中清秀

川崎市の北部、多摩丘陵の東端に位置する森林地帯で、昭和四十三年からの宅地開発で古代の竪穴式住居や食糧蔵の跡が発見され、神奈川県東高根遺跡として認定された。さらに、樹齢二百年とも言われるシラカシ林が自然に近い形で残っており、その価値が認められて昭和四十六年に天然記念物に指定された。その後、県立東高根森林公園として整備され、多摩川とその支流の平瀬川に囲まれた、広さは十・六ヘクタール、近隣住民に自然環境豊かな憩いの場を提供する都市公園となっている。令和二年九月十一日、天候は晴れまだ夏の暑さの残る蒸し暑い日となった。かさね吟行会でこの東高根森林公園を訪れるのは平成二十八年、二十九年と今回が三回目である。

木漏れ日に秋海棠の濃く淡く
 伸ばす穂の結べるほどに金水引

周二 正規

里山的な雰囲気を残すこの公園には、数多くの草花が植えられている。今は花の少ない季節であるが、秋の七草を始めとして、キバナコスモス、シユウカイドウ、ツリフネソウなどが咲いていた。野鳥類も多くメジロやコゲラ、そして湿性植物園にはカルガモが棲みついている。さらに、散策の為に設けられた木製の棧道からはメダカやコイ、蝶や蜻蛉をはじめ四季折々の小動物の生態が観察でき、訪れる人を楽しませられる。折しも近所の人々が糸を垂れてスルメイカでザリガニをバケツに余るほど釣り上げていた、なんとも長閑な懐かしい風情に出合った。アメリカザリガニは繁殖しすぎるので駆除のお手伝いをしてもらいたい。

木道にかかる小枝や式部の実
 一とこ隠るるやうに草の花
 秋暑し木洩日揺らす池の鯉

さち子 陽子 紀政

今年はやがて残暑の影響で紅葉はやや遅れている、わずかに枝先にモミジやハゼの色づきが見られただけだった。やはり綺麗な紅葉は十月末から十一月にならないと無理だろう。シーズンとなれば、都内でも神宮外苑の銀杏並木や小石川後楽園のイロハモミジ、六義園の紅葉と

大名庭園のライトアップなど見所が多く有る、赤や黄の色とりどりの色葉が今から楽しみみである。

初紅葉たれに見よかす池面かな

素山

薄紅葉雲のたなびく日となりぬ

清秀

古代芝生広場には、発掘された六十軒ほどの竪穴式住居が地下に埋め戻さ静かに眠っている。子供達の走り回る芝生の上から、古代の人びとの生活はどのようなものだったのか、電気もガスもない不自由な生活でも幸せに暮らしていたのか、などと遠い昔に思いをはせる。

古代植物園では衣食住に関わってきた植物四十八種が植えられていた。食糧、衣料、染料薬などに使われた植物を七つの部門に分類して栽培している。日本文化と植物の関わりがここで学ぶことができる。またここには、多くの万葉集の歌の碑も添えられていた。万葉集は奈良時代末期に成立したと言われる現存する日本最古の和歌集である。専門家ではないので詳しくは知らないが、天皇から一般庶民まで身分を問わず多くの和歌が選ばれている。収められている歌の数はおよそ四千五百首、雑歌、相聞歌、挽歌に編集されており、編纂には大伴家持が関わったとされている。万葉仮名という独自の表記法

が使われ、全文が漢字で表意あるいは表音的に書かれている。日本人による日本人のための最初の文字であった、そして、その後の平仮名と片仮名の創造に繋がったとされ、和歌の原点であると同時に日本文化の源泉をなしている。最近では、令和の元号がこの万葉集の一節に典拠していることで話題となった。

句会はこの公園の近くのレストランで行われいつものように囀目三句出し四句選で行われ、古代の遺跡跡と自然環境の豊かな公園をめぐる吟行会は楽しく無事にお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 二〇二〇年十一月十三日(金)

場所 千葉県袖ヶ浦

集合 川崎駅時計台下 9時15分

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』(一〇三) 丸山酔宵子

『横浜郊外真夏の思い出』

8月は6日(むいか)9日(ここのか)

15日(じゅうごにち)

作者不詳

これは広島、長崎、終戦を詠んだ句で、8月はいつても熱くそして昔を思いだし感傷的になる月である。

7月の長梅雨も終わり、8月に入って一気に猛暑の真夏日が続く、コロナ禍に加え熱中症にも気にしなければならぬ。子供たちは夏休みで本来ならば外で元気よく飛び跳ねているのであろうが、コロナ禍で近所の駒沢公園にも子供の姿がない。

昭和の時代の子供たちの夏休みと言えば、夏休み帖を渡され、絵日記を書き、早朝のラジオ体操に、夏休み工作等々、子供心にかなり忙しい日々であったような気がする。

しかし、午前中は夏休み帖とか「百万人の算数」などの勉強をしたふりをし、昼食後の午後となれば、近所のガキ友達と連れ立って海や山で腕や膝は擦り傷だらけに赤チンを塗り、真つ黒に日焼けして皮がむけるほど外で遊んだもんだ。

今は本牧付近から磯子、岡村、滝頭、森そして杉田に至るまで埋め立てられ、高速道路も走る広大な工業地帯となっているが、その当時の杉田や屏風ヶ浦付近は、まだ東京湾の遠浅の海が広がっていて絶好の海水浴場であった。市電も走っていて、横浜の開港祭りでは本牧三溪園あたりから火花が打ち上げられ、子供達には華やかな花電車も楽しみであった。因みに、美空ひばりは滝頭で生まれ滝頭小学校に通っていた。家はご存じ「魚屋」を中原に近い杉田にあった小さな市場で営んでいて、市電の終点近くにあった杉田劇場が歌手デビューだったそうだ。

泳ぎつかれた帰りにいつも必ず寄るのが古い豆腐屋の外にある大きな貯桶に入った冷たい水を桶に汲んで、火照った塩っぱい体に、頭から思い切つてぶっかけた快感

は今でも忘れられない。

ダーウィンの進化論によると、「変化に対応できなければ生き残れない」ということだが、家に閉じこもってゲームに明け暮れている子供たちはどうなってしまうのか。

大人も三密を避けたステイホームで暇を持て余し、只管（ひたすら）家（いえ）呑みの毎日で酒量が増え、進化どころではなく退化老化スピードが上がってくるようだ。

日本の8月はいつでも特別で、懐かしさと反省といういろいろなことを思い出させてくれる。

コロナ禍で三密避ける原爆忌

黙禱に鐘の音（ね）響く原爆忌

コロナ禍や正午の黙禱終戦忌

酔宵子

楽しい時間 96

山本紀久雄

2020年9月30日

鉄舟から影響を受けた九代目市川團十郎・・・その二

江戸歌舞伎は何時始まったのか。それは寛永元年（1624）、徳川將軍家光の代に、京から下った猿若勘三郎が中橋南地（現在の日本橋と京橋の中間）に「槽をあげた」時に始まる。都に出雲のお国が登場してから20年ばかりの後である。

下左の写真は、これを記念して昭和32年（1957）に建立された「江戸歌舞伎発祥之地」の碑で、銀座と京橋を分かつ高速道路のすぐ脇にある。

すぐ傍らには「京橋大根河岸青物市場跡」の碑もあり、ちよつと休める椅子があつて、そこに座り込むと江戸と明治の下町感覚に浸たることができ、その余韻でしばらく立てない気分となるだろう。

なお「槽をあげる」とは、幕府に願い出て常設の興行を許可されると、小屋の正面の木戸の上に大きな槽（座紋をつけた幕をめぐらす）を掲げることができた。小芝居や見せ物の興行はそれが許されなかつた。そこで、許可を受けて興行を始めることを「槽をあげる」と言った。下右写真は現在の歌舞伎座の槽である。

中橋南地に槽をあげた猿若勘三郎、のちに中村勘三郎となり堺町に中村座、隣の葺屋町の市村座、木挽町の森田座と山



村座、古伝内座などが幕府に願い出て興行の許可を受け、それぞれ槽をあげている。

当時の歌舞伎役の人気役者は、初代中村勘三郎も、人気の女形である玉川千之丞、玉川主膳も京下りの役者で関東者はいなかつた。ここに初代團十郎の出現が待望された背景がある。

さて、前号で触れたように十二代目市川團十郎は、まだ十代目市川海老蔵だった昭和59年11月、山梨県市川三郷町の歌舞伎文化公園に「初代市川團十郎発祥之地」の石碑を建立したのであるが、それに対し「山梨歴史文学館」ブログが、「市川團十郎の祖は甲斐の三珠町（現・市川三郷町）の出自地の歴史なつていくのであろうか。史実とするには確かな史料を積み重ねることが肝要である。歴史は創作してはならない」と批判的見解を述べていることについて検討してみたい。

文化五年（1808）『近世奇跡考・下』（山東京伝）では、「江戸の俳優初代市川團十郎は、堀越重蔵といふ者の子なり」と述べている。『市川團十郎代々』（服部幸雄著）でも、

《通説に従えば、初代團十郎は万治三年（1660）江戸の和泉町で生まれ、幼名を海老蔵と言った。享保十五年（1730）に作られた初代の追善句集『父の恩』の記事によると父親は堀越重蔵（十蔵とも）と言い、幡谷村の土地を弟に譲って江戸に出たのだとことである。重蔵はなかなか氣骨ある人で、人望厚く地子惣代を務めるほどの顔役だった。俠客たちとの交際もあり、「孤の重蔵」とも、また顔に疵があることから「面疵の重蔵」ともあだ名されていた。著名な俠客唐犬十右衛門と親交があり、初代團十郎の幼名海老蔵の命名者は十右衛門だという伝説も語られていた》

しかし、先祖については謎に包まれていて、よくわからないという。

例えば鳥亭馬（戯作者。五代目團十郎の熱烈な後援者）の『市川家譜』によると、先祖は代々甲州の武士で、永正年間（1504～21）に北条氏康の家臣になり、天正にいたって小田原没落後、下総国埴生郡幡谷村（千葉県成田市幡谷）に移り住み、重蔵の代になって市川へ移って郷土となり、江戸初期の慶安・承応（1648～55）のころ江戸に出たという。

これとは別に、奥州壺の碑の近くにある市川村から出たという説（『松屋筆記』巻四）もある。

また、葛飾郡市川村（千葉県市川市）の商人の子として生まれたという説もあって、それによると初代團十郎は幼いころから聡明で弁舌にすぐれていた。十三歳の時、田舎まわりの役者に才能を認められ、誘われて役者の仲間に入り、以後、処々方々の田舎をまわって実力をつけ、二十七歳ころには田舎芝居の立者（中心になる立派な役者）になっていたが、一

座が解散したために単独で江戸に出て、葺屋町の市村座に抱えられたという。

いずれにしても当時の芸能人の出自が明白であるのはむしろ不自然というべきで、後代になってからもっともらしく創作された可能性が高いという。

そのとおりと思うが、市川三郷町の歌舞伎文化公園内に建立された「初代市川團十郎発祥之地」石碑にはこう撰文が刻まれている。

《我が市川家発祥の地は何処なるや 探し求めて長きに亘る 時至り昭和七年 市川三升こと十代團十郎来甲の砌 石原家に三百有余年秘蔵せし古文書並びに系図一卷閲覽 書中に曰く 堀越十郎家宣 元武田家に仕え後下総国幡谷に移る 其の孫堀越重蔵江戸に出づ 其の一子即ち初代市川團十郎也云々と 三升驚喜し 直ちに銅像建立を思い立ちしが果たさず・・・》

加えて、市川三郷町の歌舞伎文化資料館が作成した資料「市川團十郎の代々」で、十代目の説明のところで、《又発祥の地の証拠となる古文書等が昭和7年に出てくる》と加筆している。

十代目の市川家に対する強い想いが、「石原家に三百有余年秘蔵せし古文書並びに系図一卷閲覽書」を発掘し碑文化し、歌舞伎文化資料館でも石原家の古文書に基づき資料化しているのだから、石原家の古文書の写し等が同館に存在しているものと推測する。

そこで同館に対し一連の古文書等を閲覽させていただきたいと連絡したところである。

絹の話 (120)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

新型コロナウイルス禍の絹の販売（除和装）

絹の販売環境の変化

江戸時代までは上質な絹は庶民が着る事が禁じられて来ましたので（紬以下は可）、現代も絹が糸の加工方法で麻のようにも霞の様に柔らかくもなる事を知る人は意外に少ないのです。また絹製品販売説明下札などにもどの様な種類の繭のどの部分を使って、どう加工したか明記された物は有りません。多くの方が絹は非日常的な高価な物で、洗濯や保存が難しい、と云う認識です。

それでも絹は現在も繊維の王様に変わりは有りませんので新型コロナウイルス以前はパーティーや結婚衣装などの注文が有りましたが、三密を避けるため、そのような企画が殆ど無くなり、特注は皆無になりました。

再会されたデパートなどの絹製品催事などでもドレス類は来場者の目を楽しませる事はあっても、殆ど売れなくなりました。ところがお客様の懐は新型コロナウイルス禍で出費が少なく、やや暖かいようで、カジュアルなデザインで価格もリーズナブルの物は以前と変わりなく売れてい

ます。それも以前なら都心のデパートに直進される様なお客様が気晴らしを兼ねて郊外型のデパートにやや安心した表情で来店される様になりました。

来店客については初老以降の夫婦連れのお客様が増え、以前は奥様が品選びをしていると、「早くしろ！」などと言って無関心を装っていたご主人が一緒になって鏡を覗いて、二人で買い物を楽しむようになりました。

男性が加わると決まりも早く私共の販売促進にも役立ちます。この様な光景は高度経済成長期にはあまり見かけませんでした。新型コロナウイルスによる新たな消費行動が形成されて行く様に感じます。

絹の売れ筋の変化

新型コロナウイルス禍が長期化してきてマスクがファッション化して来ました。

複数の素材のマスクを使った結果、ある物は半日で臭気を感じるようになり、ある物は口の周りが湿って高温になって不快を覚え、熱中症にも繋がると云う報道に接し、身体の僅かな面積で素材により、これほど人体に顕著に差異がある事に多くの人が気付くようになり、地球温暖化問題の1度〜2度の温度上昇を他人事の様思っていた人達が自分の事として問題意識を持つようになりました。その結果、より快適で省エネマスクが探される

ようになって来ました。まさに絹のマスクの登場です。一口に絹マスクといっても繭の種類（野蚕、家蚕）によって少しずつ機能が異なりますが、臭気を覚えず、発汗も早くべたつかず、洗濯も毎日不要で、多くの人の要望に応えられつつ有ります。

絹製品の売場では外出用お洒落着から、癒やしに繋がる日用品の絹の枕、抱き枕、シーツ、毛布、腹巻、靴下などに関心が集まる様になって来ました。この新たなお客様にはシルクがどの様に作用して健康によいのか機能的性を簡単明瞭に短時間で説明する事が求められます。

ところが、百貨店などではシルクの機能的性を認めていませんので、印刷物にして顧客に渡す事が出来ません。口頭で話すしか方法がありません。商品に関する最新の情報顧客に伝える事が新しいサービスになって来るとも思えます。「今日はここに立ち寄ってよかった!」……心の満足、これも大切なサービスです。

これからの新絹産業

絹は古来から羽振る（羽振りとは薄絹をなびかせて歩くさま）ものでした。しかし絹を大量に使用して来たのは兵装等でした。中国の漢族はミャオ族から習得した絹を大量生産して、スキタイの鉄器と交換し、青銅器から鉄兵器を装備して強力な軍隊を作りました。さらに軽く

て防矢、静菌、保温などに優れた絹のフェルト（絹羊毛混）を軍事に用い強大な国家を築きました。

その様に絹の機能的性は紀元前から認識されてきました。今まさに、温故知新です。人類より遙かに長い進化生存の歴史をもつ昆虫に習う事は沢山有ります。

絹は厚手に着ると活性炭素を中和して疲労回復、老化防止に役立ち、幸せホルモン（オキシトシン）の分泌を促進して心の安定に繋がり、静菌性由来の健康維持素材とした健康指向で癒しの商品開発が期待されます。

既に絹は 織物以外にパウダ、ゲルにして化粧品、サプリメント、食品、医療用品に、蚕がインターフェロン等の医薬品製造にも活躍しています。また昆虫食にも利用されはじめました。

新たな顧客の形成

和装以外の絹の愛好家は大きく分けてドレス派とインナー派に分かれていましたが、新型コロナウイルス禍が進行する中で、今まで絹に関心を持たなかった、絹枕やシーツ等を求める新たな年齢を超えた巾広い老若男女の購買層が生まれつつ有ります。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2020年10月6日

ぎっくり腰を予防する

台風の影響からか湿度が上がリ
秋らしい気温というよりも

大分寒さを感じる様になってきましたね

この様に気温が下がり冷たい風が吹きますと

身体がしっかりと冷える様になります

そうするとぎっくり腰やぎっくり首やぎっくり背中

などのいわゆるギックリ系が出やすくなります

そこで大切なのは睡眠と身体を温めること

睡眠不足と体温低下は免疫力も大きく低下させます

基礎体温を下げないという事はとても大切な事です

□□ナの影響で朝に体温を測る方が増えたと思います

もちろん夏場は気温も高いので基礎体温も高くなりま

すが

今の時期になっても夏場と大きく差が出ない様に二つの

目安としてみて下さい

そこでどうすれば下がらないか？

寒くなると汗をかかなくなるので水分摂取量が減ります

水分補給を温かい飲み物でしっかりとる

(それが無理な場合は常温で)

湯船のつかり方を変えろ

湯船のつかり方は 温度をそこまで高くせず38度〜41

度くらい

いつもの気持ち良いといくらいいで出るから15〜30分長

くつかろ

湯船に身体が温まる入浴剤を入れる(肌)に注意しながら

などで1日で冷えた身体をリセットすることが大切です

睡眠は毎回書いていますが

23時までに入眠する とにかくこれが大事です！

睡眠と身体をあたためる

是非ともやって体調を崩さない様にしていきましょ

う 今日笑いなから行きましょ

2020年9月23日

気温差と気圧

朝晩の気温がグッと下がり

暑さ寒さも彼岸まで の言葉通り

すごしやすい日々となっています

こんな時

台風も相まって

頭痛

首 肩の痛み

背中の痛みやつり

などの症状が出やすくなっています

気温差と気圧の変化は身体にこたえます

特に胆のつや脾臓に負担が出て来ます

それに

油分の多いもの（洋菓子や揚げ物など）

糖分多いもの（菓子など）

炭水化物の過剰摂取

などは10食食べていたものを7〜8食に減らし

食事の量も腹八分にしてみてください

先ほどの身体の症状が出ましたら

23時までには就寝して

ゆたぼん で内臓をとにかく温めて下さる！

スマホなどの見過ぎなどにも気をつけて下さるね

今日も笑いながら行きましょっ

「江上浩二の独り言」 35 江上浩二

意外な自分自身の経験

先日（2020年9月初旬）、CATVのローカル番組で2007年に放送された関東大震災の横浜での記録が再放送されていた。震源地は相模湾だったが大都市東京の悲惨さばかりが後年報道されて、震源に近い横浜の災害状況がどうだったのか報道されていることは極めて少なかった。

私は今六十七歳、横浜生まれ、父も大正十年の横浜生まれで、関東大震災の二年前だった。この番組を見て、父が生まれた中区長者町（伊勢佐木町の近く、私の出生本籍地も）が壊滅的な被害を受けたことを白黒の映像から知ってぞっとした。

都内でも火災で十万人以上の死者があり、横浜でも同様に火災で多くの死者が出て、二歳の父がその焦げた瓦礫の下になってしまったと想像すると、、、（今の私の独り言は幽霊詞になってしまふ）

父が生き延び、その小さな父を守ってくれた祖父も昭和二十年に六十三歳で戦死ではなく病死したそうである。父が六年後に結婚し、昭和二十八年に私が横浜の生

麦で生まれ、横浜出身として、世間に言いふらすようになった。

ここからが自分の経験とは何か、少し考えてみたい。実際、私が横浜で暮らしたのは、七年と五か月と短い。小学校一年の途中で同じ神奈川県の小一時間かかる農家がまだ牛を農耕に使っていた他地域へ、普通の工場の勤め人だったオヤジが家を建てたので引越した。しかしこの短い横浜と言う経験が私を育ててくれたと思う。

経験は実体験と後で学んだ歴史的事実が加わった今というバーチャル経験であってもいい、想像すると人の経験はこの類である。

それは関東大震災の番組の中で、ある老人（八十七歳、震災時父と同じ二歳）があたかも自分が被災した事、町の様子、例えば木造の××橋が崩れる前に山の手側（今の元町の高台）に逃げ延びられたことを説明されていた。非常に生々しい内容だが、TVのテロップでは当時大きかったお兄様より後年お聞きになった話がベースとされたとあり、それらを自分の体験に転嫁されたようである。これがバーチャルであって、自分の小さい頃の横浜の経験も同じだと思つたのである。

本当に当時小さな私が意識し記憶している体験を列挙し、それらが後の学習によって正しいのであるが加飾された例（*印がある行の説明）を幾つか上げる。

鶴見区生麦に生まれた私は、家族で2両で繋がった電車（京浜急行）に乗って出かけた。

*生麦が、薩摩藩士が幕末、英国人を切りつけた歴史的場所などと当時知る由もない。歴史書

二年保育の幼稚園に通ったが、そこは家族経営の幼稚園で園長先生が二階に住んでおり、時々朝、園長先生を呼びに行かされた。

*その幼稚園は、後プロレスラーになった猪木選手の実家で、ブラジル移住後はお兄さんが残り経営した。幼稚園の名前には「いのき」は含まれず別名であった。当時猪木選手は中学生だったらしいが、小さな私は見かけたこともなかった。親の話

横浜の大栈橋でよく遊んだ。

*写真好きだった父が残してくれた栈橋で撮った兄との兄弟写真があり、それを見て栈橋によく行ったと記憶している。

よく覚えている叔母さん（父の姉）の家にいった時に頼んでくれて美味しかった店屋もののトロミのある中華そば。

*家は南京町（当時は中華街とは呼ばれていない）の近くにあり、中華麺は横浜で有名な生碼麵。「さんまーめん」という発音は記憶している。

その叔母さんの家に行くには電車で生麦から横浜駅へ、そこで乗り換えるのだが、路面電車（市電）とバスがあった。

*バスは野庭口行の市バスと上大岡を経て鎌倉街道をゆく大船行のオレンジ色の鎌倉急行があつて、いつもバスに乗せられた。

父からよく聞いた話、父が山下公園で遊んだこと、海辺なので鮭の切り身を餌にカニを釣ったこと。

*山下公園は関東大震災の瓦礫で浅瀬を埋め立てて出来た公園（昭和五年）であることを後年知る。歴史書

これらの学習した「横浜」は後で学んだことが加わって自分の体験として身についた。よく考えるところはバーチャルで加飾された体験である。皆さんの小さい頃の体験・経験を振り返ってみては如何ですか。

漢詩研修 (四十九)

千代田岳精会 平井茂行

奥おくの細ほそ道みち (平泉ひらふみ一節いっせつ) 松尾まつお 芭蕉ばしょう

偕さても義臣ぎしんすぐつて 此この城しろにこもり

功名こうめい一時いちじの叢くさむらとなす

国くに破やぶれて 山さん河があり

城しろ春はるにして 草くさ青あおみたりと

【作者】

芭蕉…本名松尾宗房（一六四四・正保元）一六九四・元禄七）江戸初期後半に活躍した。伊賀上野（三重県伊賀上野市）に生まれ、十歳頃領主藤堂新七郎の子良忠に仕えた。この良忠（号・蟬吟）が俳諧をたしなむことから、芭蕉も俳諧に興味を示した。良忠の師が季吟（貞門派）だったので、芭蕉もはじめは貞門派の俳風を学んだ。良忠の死後、江戸へ出た芭蕉は貞門から談林派へ移り、やがて自己をみつめる薫風は発展して行く。人生を旅と考え、旅の実践によって誠の芸術を求め、わび・さび・かるみの理念を樹立した。

笠^{かさ}打^うち敷^しきて 時^{とき}のうつるまで
 涙^{なみだ}を落^おし侍^{はべ}りぬ
 夏^{なつ}草^{くさ}や 夏^{なつ}草^{くさ}や
 兵^{つわもの}どもが 夢^{ゆめ}の跡^{あと}
 兵^{つわもの}どもが 夢^{ゆめ}の跡^{あと}

『人事の妙』

中屋保之

二〇〇〇年問題を無事過ごしたこの年の六月、私に「倉敷支店勤務を命ず」と辞令が下った。会社生活も三十年が経過していた。この頃の内規で、私たち五十半ば近くの社員は、原則自宅通勤が可能な支店への配属と聞いていたため少し困惑したが、会社勤めの常として止む無しとの覚悟はあった。が、東京の我が家からは、五百五十kmあまり、新幹線を利用しての五時間はいかにも遠い。老父母と妻、社会人として日も浅い息子と娘を残しての単身赴任は些か辛いし、経済的にも負担がばかにならない。帰宅時の交通費、通常受けられるはずの家賃補助が全額自己負担だという。唯々諾々(?)と会社の方針に従ってきた私であるが、この時ばかりは「内規」を盾に人事部との交渉を試みた。幸いにして、当時の人事部の若い社員が親身になつて様々な特例を駆使してくれ、家賃の半額補助、月二回の帰宅時のうち一回分を会社負担としてくれたのである。認知の兆しが出始めていた母と頑固者の父を妻に託し、岡山へと向かった。

私たちにとって幸いだったのは、本社勤務の折り同じ部で一緒だった先輩が岡山在住であったことである。この十年年長の先輩と奥様には、倉敷在任中、私は言うに及ばず妻や子供たちや、それぞれの伴侶に至るまで親身な世話に浴することになる。「晴れの国 岡山」のキャッチコピーが表す様に、晴天の岡山駅に降り立った私を、先輩が車で迎えに来てくれていた。倉敷での住まいが決まるまでの宿泊先である独身寮に荷物を運び込み、ご自宅へと誘ってくれた。ご馳走になった白桃の甘く瑞々しい味は、奥様の笑顔と共に今でもはつきりと覚えている。倉敷に居を構えるまでの約二週間の半分は、先輩の家から勤務先の倉敷まで通わせていただいた。日本三大名園の一つの後楽園を突っ切つて、岡山城を眺めながらの通勤は中々贅沢なひと時でもあった。

勤務先から徒歩で十五分ほどのマンションの一室を住まいとした。同じマンション内に親切この上ない年下の同僚がやはり単身赴任していた。私は、東京の妻から送られてくる冷凍食品と近所のスーパーが頼りであったが、この同僚は料理の腕前が抜群で、よくご馳走になったのも楽しい思い出として残っている。勤務先の社員が若かったせいか、夜の飲み会にも付き合ったが倉敷の閉店時間は東京に比べれば実に早い。健全そのものである。

その間にも、先輩ご夫妻の暖かいお招きにあずかり、時折りの岡山の夜を先輩のお供で満喫させていただいた（こちらも極めて健全そのもの）。泊めて戴いた翌日に、近くの温泉や名所を先輩の車に乗せて戴いての小旅行を堪能するという誠にありがたい日々を過ごしていた。

「好事、魔、多し」とはよく言ったものである。その年の年末年始を自宅で過ごすべく妻と娘が出迎えに来た東京駅からの帰り道、私の携帯が鳴った。息子が帰宅途上に「バイクに跳ねられ救急搬送され手術の要あり、直ぐに来られたし」との事。忘年会の帰りで、アルコールも残っていたようだったが横断歩道上での事故ということで息子に過失はなかったとの報告と、手術が無事終わったのを見届けてほっと胸を撫でおろしたものだ。

この事故には後日談がある。勤務先の同僚との結婚を決めていた息子は、会場も手配していた。その会場の関係者の子息が加害者であることが判明した。親に相談なく事を進めたことに内心不満を持っていた妻は、これを機に猛烈に干渉（？）、会場の決定に自分の意を反映させることに成功したのである。そこは、私たちが式を挙げた目白の椿山荘であった。新婚の二人が倉敷に遊びに来た折り、揃って岡山へ挨拶に伺った際にはご夫妻とも大変喜んで下さったの言うまでもない。

先輩の名は楠戸武さん、奥様は節子さん。私たち家族にとつてかけがえのない恩人である。残念なことに、妻も節子夫人も相次いで数年前にこの世を去ってしまった。最愛の夫を残して…

児玉神社を訪ねて作有り

横山精真

画島がとうの風光ふうこう客かくを招まねきて繁しげく

青嵐せいらんの廟宇びょうう塵ちりを絶ぜつして尊とうとし

偉人国いじんくにを護まもりて天命てんめいを全まっうすれば

東海とうかいの靈峰れいほう魂こんを慈いつくしむが如ごとし

訪児玉神社有作

令和二年九月一日

畫島風光招客繁 青嵐廟宇絶塵尊

偉人護國全天命 東海靈峰如慈魂

(語釈) ○画島：江ノ島。○風光：景色。○青嵐：青々とした山の気。○廟宇：みたまや。御霊をしずめまつる所。○天命：天の与えた使命。天の与えた命。○霊峰：富士山。○魂：たましい。こころ。

(通釈) 江ノ島は湘南の景色を楽しみに人が引きも切らず押し寄せる。その江ノ島の山道を少し登ると左手に兎玉神社へと階段が続く。境内に入ると今迄の喧騒から離れ、山の木々に囲まれて厳かな雰囲気の中に立つ。

御祭神である偉人にして且つ英雄である兎玉源太郎は日露戦争にてこの人でなければ出来得なかつた軍略で戦い抜き、遂に皇国を守つたのである。そして彼は戦争が終わつて命を燃焼しきつたようにして亡くなったのである。天の与えた使命、また天の与えた命を全うしたのだ。今は、正に霊峰富士が風光明媚なこの江ノ島に祀られる霊魂を慈しむかのである。

※コロナ自粛が始まる頃「後藤新平」を読み始めていた。強烈な個性と共に維新後の東西を超えた人生のご縁、勉強能力の高さ、責任感、成し遂げた成果の偉大さに感銘を受け、同時に兎玉源太郎に改めて思いを馳せていた。日露戦争に当たっては内務大臣から参謀本部次長という降格人事を受けて立つた兎玉源太郎の戦略はスケールが大きく大胆で細部に行き届いている。ロシヤの後方攪乱、始める前からの終戦工作、常に現実的な戦費の心配等その後の戦争指導者にはみられないものだ。戦術も二百三高地にその有能ぶりが明らかである。日清戦争の検疫と台湾統治では後藤新平の上司として彼の能力を遺憾なく發揮させた腹の据わつた度量がものを言つた。台湾統治にあつては、例えば今年亡くなつた李登輝さんに「私は二十二歳まで日本人だつた」と誇らしげに言わしめるまでの見事な統治を成したのである。私共は今、この様な明治の偉人達にスポットを当てて敬仰すべき時である。

親迎釈尊

今泉由利

幽庭古木小斎の中
ゆうていこぼくしょうさいのうち

懷抱博枝瑞氣籠る
かいほうはくしずいきこも

刻劾渾身吾意に適
こくこくこんしんわがいかのお

仏陀発処寸心の忠
ぶつだはつするところすんしんまこと

幽庭古木小齋中
懷抱博枝瑞氣籠
刻効渾身吾意適
佛陀發処寸心忠

(語釈)

- 幽庭 〓 深く神々しい庭
○小齋 〓 清められたところ
○親迎 〓 自らおもむかえする
○瑞氣 〓 ありがたく思う
○發処 〓 生じる・はじまる
○寸心忠 〓 真心を尽くす

(詩意)

菩薩寺の庭の木材をいただいた。

この古木から、お釈迦様を彫ろうと思ったった。

母によく似て彫りあがった仏様。

私の日常の一番近くにおいて下さるのです。

芭蕉と子規2

夏目勝弘

子規は白河駅で下車、東半里に結城氏の城跡ありと聞畦道を辿り行く

○涼しさやむかしの人の汗のあと 子規

白河に帰り中島某を訪う

○夕顔に昔の小唄あはれなり 子規

翌明町はつれの天満宮に杉の古木あり

○夏木立宮ありさうなところかな 子規

白河を途上り占

○麦刈るや裸の上にももひとつ 子規

○山里の桑に晝顔あはれなり 子規

○やせ馬の尻ならべたるあつさかな 子規

そして須賀川に道山氏を訪う。

翌日朝、安達太郎山白雲の間に隠約たり

○短夜の雲をさまざまあたたらね 子規

そして浅香沼という大池を見に行く。

○水無月やころらあたりは鶯が 子規

(とにかくに「百餘年の昔芭蕉翁のさまよひしあと慕ひ行けばいづこか名所故跡ならざらん」と「はてしらずの記」に

○その人の足あとふめば風薫る 子規

南杉田の遠藤菓翁にすすめられるまま泊。

奥の細道の跡を遊観せらるる子規君を偲して

○草深き庵やよすがらほととぎす 菓翁

子規は礼を述べ其家を立つ。

○水無月をもてなされけり時鳥 子規

二本松を過ぎ、阿武隈を渡れば老杉あり、木末の枝の大方に枯れ残りて

鬼女の爪の如し。

○木下闇あゝ涼しさや怒ろしや 子規

二本松を横ぎり道を、問うべき家もない、道に迷い、坂を二つこえて聞けば、

寺は此の山の裏とぞ、いただきに見える松の下に樵夫の通う路あると、人の通らぬ山の道を行く。

○下闇にただ山百合の白きかな 子規
目の下の木の間に屋の棟こそ寺と下れば、また方角を失う。

ようやく大神宮を祭りし宮より見下せば、寺のあり。

○山寺の庫裏ものうしや蠅叩 子規

飯出山満福寺

○すゞしさと神と佛の隣同士 子規

この寺に義経公が立ちよられしと、山号のなきゆえ、弁慶が、名づけたとか。

○水飯や弁慶殿の喰ひ残し 子規

月明りに行水をし庭前にて葉柳の風に涼む。

○ひろしきに僧と二人の涼みかな 子規

○御仏に尻向け居れば月すゞし 子規

書院の真中に寝ころび我が身此世ならぬ心地。

○寺に寝る身の尊とさよすずしさよ 子規

満福寺を立ち二本松より瀧車に上る。

○眼のさめた頃かよ合歡の花の散る 子規

福島のある屋に泊る。郊外の小さき山つ、信夫山なり、十二日の月澄み

渡り青田を渡る風涼し、町に帰る心なし畦道を行く。

○笛の音の涼しう更くる野道かな 子規

忍の掬の石を見に、一里半の道を行き。

○涼しさの昔をかたれ忍掬

炎熱に堪えられず、福島より人力車にて飯阪温泉に赴く。

○夕立や人声こもる温泉の煙 子規

芭蕉は郡山に泊、安積山をたすねそして忍の里(信夫里)に文字掬石を見に行く。

○早苗とる手もとや昔しのぶ掬 芭蕉

ここから芭蕉は、飯塚近くの丸山に、信夫の庄司元治の館跡をたすね、佐藤家の墓前で。

○笈も太刀も五月にかざれ紙幟 芭蕉

飯塚に泊った芭蕉は、夜になって持病に苦しみながら、翌日は雨のなかを立つ、昨夜の痛みが残っていたが、もとより生命を捨てての旅であると気をと

り戻して、伊達の大木戸を越えた。

「氷魚」のことから (238) 岡本八千代

今年も九月十九日の「糸瓜忌」(糶祭忌)も過ぎてしまった。この名前は子規忌のことである。今年も淡々として過ぎてしまった。しかし玄関には糸瓜の絵の手拭が飾ってある。この手拭は私が平成十九年の十月の頃、東京根岸の子規庵へ訪れたことがあって、その時に買ってきた手拭である。毎年、この頃になると飾る。糸瓜のことをフランス語(?)で「Laitue」と糸瓜の絵と共に染めつけてある。そして、下の方に「子規庵」とある。

この思い出の心のままに、茂吉の「をさな妻」のこと、書こうと思う。

「をさな妻」と言ってもまだ結婚はこの時はしていない時の歌であった。やがて茂吉の妻となったのは、大正三年(1914年)茂吉三十二歳、斎藤紀一長女輝子十八歳になったからであった。

「をさな妻」のかの頃は、まだ輝子は子供で、茂吉は、輝子をおんぶして子守りしたほどであった。

輝子さんとはどんなセンスの人だったか。輝子は、明治41年に、女子学習院に入学した。輝子は青山から人力車で通学したが、電車で行くときは平河町で降りた。……。同級に、斎藤美代子(故長興善郎の姪、駐米大使故斎藤博夫人)、近衛千代子(元総理故近衛文麿公夫人)二荒菖子(元北白川宮、二荒夫人) 洪沢チカ子(洪沢秀雄氏義姉)、徳川千枝子(徳

川好敏中将夫人)等々。

やがて、学習院長が、乃木希典大将となり。いろいろと改革が行われた。女子部も下田歌子女史が引退。いろいろな改革が行われた。質素を第一とされて、例えばメイセン以上の着物を着てはいけない。ハカマもカシミアに、風呂敷は黒、リボンは大いはいけない。体の悪い時以外は人力車はいけない。等々改革。

また、輝子は、雑誌の口絵写真にとられたこともあり、髪も、庇髪にした写真もあって、そこには、「緋牡丹」というタイトルがついていて、「青春の血汐凝りて牡丹」とは、そも何国の諺なりけん、緑も深き奥庭に、爛として照りはゆる王者の矜りよ。ドクトル斎藤紀一氏令嬢輝子(学習院女学部)という、説明がついていたのであった。

父親の紀一という人は、子供を非常に可愛がり怒ったことがないといわれていた。

茂吉は、その頃巢鴨病院での給料は、「アララギ」にみなつきこんでしまっていた。東京堂で「アララギ」が三十冊売れたとって大よろこびをした時代でもあった。「をさな妻」を歌ったとは言え、輝子の母親に「母さま、五円下さい」とか、ねだったりして、輝子どころではなかったらしい。お金をもらいさえすればアララギにつきこんでいたらしい。

まだ、結婚はこれからであるが、茂吉らしい男らしさがあった。緋牡丹のような女でもやがて二人は結婚するのだから、縁の不思議か。いや、輝子も茂吉をよく観てゐると思う。

編集室だより【二〇二〇年九月】

今泉 由利

○家から出ない日が続いている。我儘いっぱい自分を甘やかす：今まで生きてきたことを、懐かしく思い返し、矯正出来ることは正し、得られる知識は加え：自分好みの自分になってゆく仕度に専念している。

○日本に居た時は、自分自身の肌の色の問題があるということなど気付いていなかった。外国にいつて、自身の肌の色が、差別の対称になることを知る。

私の場合は、差別を意識しないように、むしろ特権のように、やさしく守って下さった。セリーナさんがいらしたから。セリーナさんと知り合えたから、特別な外国住いになったのだけれど。

○子供達の場合は、日本人が居なかった範囲で生まれ：学校を始め：差別の中で戦い抜き：自身の力で、自身の居心地を良くしてしまふまでを、見守った。

○差別のことは、身に染みて悲しい。地球に生まれた者どうし、いろいろな人がいることの方がおもしろい。だから、尊重をし合い、痛みを和らげ合い、お互を労りたいものです。

○三河アララギ誌を、読んで下さっている友人から『本

田カイロプラクティック先生の春夏秋冬』の先生に診療していただきたいのだけれど」と。早速、予約をお願いし、二人で出掛けた。

○もう四・五年前になるかもしれない。「パソコン」を操作していて、「本田のひとりごと」に出逢い。あまりに自身に必要だったから、電話で「三河アララギへの掲載を」お願いした。心よく応じてただけて、私の毎日の心構えとなり、ずーと。

やっと、先生におめにかかれることに驚愕しながら。明かるく、頼もしく、クリンな診療室。今のままを維持し、安心して生きてゆける感覚を得たのでした。ありがとうございます。

○四世紀後半、弥生時代に日本に伝わったとか、仏教の伝来と共に、朝鮮半島を経て日本に伝来したとか、中国の文字であり、日本の文字ではなかった漢字でもって、漢詩をつくろうなどと無謀を。

訳知らぬまま、詩吟ということに参加することになって以来、漢字について知らなければもったいない、と思うようになった。

私を知る限り、中国の漢詩は、男性の作者ばかり、女性の漢詩の無い不思議。そんな蹂躪があつていいわけがない。私、女性が漢詩を作ってみたことは悪いことではないはず。がたがた言わないで、とにかく漢詩を作ってみよう。

野菜・果物・まんだら (33) なつめ椰子、デーツ

学名 *Phoenix dactylifera* ナツメヤシ属 ヤシ科 *Arecaceae*
ヤシ目 *Arecales* 種 ナツメヤシ *P.dactylifera*



- 樹高 15~25m、雌雄異株、耐寒性は低い。実生5年ほどで実をつける。100年程の寿命。200年に達することもある。聖書の「生命の樹」のモデルといわれる。
- 常緑高木。果実はデーツ (Date) と呼ばれる。果実を乾燥させて、保存性を増す。
- イスラム教の聖典コーランに「神の与えた食物」と。旧約聖書には「エデンの園の果実」と記され、紀元前、数千年も前から、健康をささえてきた。
- 現在、イラン、エジプト、サウジアラビア、オマーン、パキスタン、北アフリカなどの国々で生産されている。
- 砂漠を移動する保存食として持ち歩く。ラクダの乳とデーツだけで、何日間も旅ができる。ラクダ、ウマ、イヌなどの餌にもされる。
- 貧血予防。鉄分、葉酸、亜鉛を含んでいて、ヘモグロビンや赤血球の生成に効果。
- ストレス緩和、カルシウム、ビタミンD、亜鉛、パントテン酸、副腎皮質、ホルモンの生成を助け、ストレス耐性をたかめる。
- デーツに含まれるマグネシウムや食物繊維、便通の改善。
- アンチエイジング効果。抗酸化作用のあるβカロテンやビタミンEが、細胞を活性化させる。
- デーツの種類は、400以上ある。マジョール種、ピアロム種、ハース種などなど。
- 聖母マリアが、キリストを身ごもっている時に毎日、欠かさず食したと。

今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yuriiimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。